
うお座

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うお座

【Nコード】

N7280Y

【作者名】

千葉

【あらすじ】

ほんとうは四月生まれ

序・ミニマリズム

酒も入っていたからだろうか、私にとって唯一の友人であると言っても過言ではない葉子を除いて、その話を語る気になり、実際語ってしまったのは尚だけだった。おぼろげに私の中に在った彼への感情が、そんな要らない気を起させたのかも知れない。

「まだ若いのに」

そう彼は言った。そう言った彼だってまだ若い。

私は確かに彼のことを憎からず思っていたのだが、例えば我々が恋愛的に結ばれて、それで上手くやって行けただろうかと考えるとどうもそれは無理なことのように思われた。彼は本当の私を見ても幻滅しない？恋をしていられる？そもそも、本当の私とは？

私は病気だ。そうでなければ、世間の方が病気だ。だからこれほどまでに、私と周囲の間には常に目に見えぬ隔たりがあるのだ。彼は私のどこを見て、何を思うのだろうか。余りにも薄いその付き合いの中で、我々は一体何を育んだと云うのだろうか。

流されているだけだ、彼のその、態度に。

私は酷い女だ。つくづくそう思う。嫌気が刺す。ほらまた、眼を合わさない。

「両想いだったんでしょ」

両想い。なんて可愛らしい響きだろう。何だか遠い昔の言葉みたい。

「ならしょうがないよ」

一体何が“なら”“しょうがない”のだろうか。

「誠意は見せてるんだしさ」

誠意とは何だ？この場合、何が誠意だと云うのだ？何も知らないくせに。

私は言葉を飲み込む。当然だ。だって彼女には何も語っていない。話したのは本当に当たり障りのない、まるでおとぎ話のように美化した真実だけだ。彼女には何もかもを話す気にはなれない。彼女は私にとって何でも無い。対人恐怖の情をちくちくと刺激する、中途半端な存在だ。そんな奴に本当のことなど、話してたまるか。

それでも私は昼休みにこうしてわざわざ待ち合わせして彼女と会って、話をする。相談をしたりする。本質を話さない相談。その意味は？眼を合わさずに通り過ぎる。それを横で、彼女も見止めていた。それでもなお、彼女はそう言って綺麗なことを言い続けるのだ。

「でも、今は好きなんでしょう？」

葉子はそう言って笑った。この問いには確かに肯定することが出来た。しかし始め、私の心が痛んでいたのは事実なのだ。私は何の感情も、本当は覚えていなかった。好きだと口にした時、私の心は酷く軋んだのだ。それは何と酷い話だろうか。

「私の言動には誠意が無い。気にしているのはそこなんだ」

三つの顔が脳裏をよぎる。それはどれも酷く苦かった。

時間が全てを解決する。彼女が出した結論はそれだった。確かにその通りだと思った。そして実際にそうだった。

「海は伸のことが好きでしょ、私はそれを知ってたんだよ。だからこれは裏切りだ」

そう言うとな彼女は困ったような顔をした。その答えはもう出ていると言いたいのだ。だって両想いだったのだから、これはしょうがないことなのだ、と。違う、これは少女漫画に在りがちな三角関係ではないのだ。何故なら私から出た線は、どこへも繋がっていない。事があってからしばらく、海は私と眼を合わせようとしなかった。

言葉もほとんど交わさなかった。元々さして親しい間柄であったわけではないが、もうこれ以上どこへも進めなくなつたことを私たちを感じていた。海が私のことをどう捉えているのかは分からなかったが、少なくとも私は彼女を裏切つたと感じていて、そのことに対する自責の念が強く巢食つていた。しかし時間は確かに何かを解決したのだ。海は私の眼を見るようになったし、世間話も出来るようになった。しかしそれが、一体何になると云うのだ？

「まだ若いのに」

尚はそう言つて苦笑した。確かに私はまだ若い。人生の何を語るにも未熟だ。

私の人生に於いて、手を差し伸べてくれたのは今までただの一人しか居なかった。少なくとも、分かり易い形で提示してくれたのはただの一人だった。私はその手を取つた。そうしなければ、私はいつまでもからのままの両手をぶら提げていないといけないのかも知れないと思つたからだ。

「次にいつ現れるか分からないから、応えておかなくちゃ、と思つた」

私の告白はただの自慰行為に過ぎなかった。彼に対しての誠意などどこにも無かつた。尚が私の方へ伸ばしかけていた手を、静かに引いていくのを感じた。彼は大人だ、私とは違う。

「幸せになれよ、お前は」

お前は？ 幸福になるべきなのは、彼のような人間だ。

いまだに信じ切れないでいる。何も無い私をここまで気に掛けてくれる人間が居るということに。彼の言葉を疑っているわけではないのだが、かといつて心の底から信用しているというわけでもない。「参つてるんだよ」

彼はそう言つて、大きな眼で私のことを見た。彼の眼は大きい。一重で、いつも眠たそうで、でも何かをじつと見詰める時には大き

い。

「もうずっと、参ってる」

彼の眼はともきれいだった。揺れなかった。彼は誰とでも上手くやれて、何でも上手くこなすことが出来る。展望の開けた将来、私とは違う、何もかも正反対。

「好きなんだよ、君が思ってるよりもずっと、でも君が、それを信用しないのも分かってる」

真っ直ぐに私を見据えたまま彼はそう言った。ほらやはり、私は不誠実なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7280y/>

うお座

2011年11月21日22時47分発行